

推薦書

受賞対象者 丸 栄一 先生

丸栄一先生は、世界をリードしてきた日本のてんかん基礎研究とその指導における第一人者として、長くご活躍されました。

丸先生は1978年に東京教育大学（現筑波大学）大学院博士課程（実験心理学および臨床脳波学専攻）を修了されました。先生は心理系の大学院でしたが、すでに「恐怖回避学習における海馬・扁桃核の電気生理学的研究」や「睡眠調節における median raphe 核の役割」といった今も重要な領域の研究を通して、神経生理学の深奥へ向かっておられました。さらに知的障害児などを対象とした臨床脳波学も副専攻されるなどのご経験から、てんかんへの強い関心を抱かれました。卒業後、日本学術振興会奨励研究員として筑波大学に、同年の9月に防衛医科大学校の生理学第2講座（辰濃治郎教授）の助手に着任されました。そこでのキンドリングに関するご研究が注目され、キンドリングの発見者で高名な Graham Goddard 教授から招かれて、1982年ニュージーランド・オタゴ大学の Ph.D. コースに留学されました。オタゴで完成した *Experimental Neurology* 誌の3部作は貫通枝キンドリングによって生じる海馬歯状回のシナプス特性の変化を論理的かつ美しく調べ尽くした研究で、今も側頭葉てんかんの基礎生理学を語る上で欠かせない知見になっています。この研究により、オタゴ大学の Ph.D. を取得されましたが、日本と違って英語圏の Ph.D. は数百枚にも上る長大な論文を仕上げなければならず、これだけでも大変な業績だと思います。

帰国後もキンドリングを中心としたてんかん研究に邁進され、1989年には日本医科大学第二生理学講座助教授に赴任されます。当時キンドリングをはじめとする基礎研究は日本のてんかん研究の中でも最先端で活気に溢れた分野であり、丸先生はその第一人者としてこの領域を牽引し、多くの後進を育成されました。その後の研究では、オタゴ大学時代から続いて、キンドリングてんかん原性獲得に伴う脳の可塑的变化を一貫したテーマとされてきました。なかでも興奮性増強にばかり注目されていた歯状回苔状線維発芽において、GABA 性抑制系が幼若化によって興奮性へ転化することを示された研究は、てんかんによる脳の変化の複雑さを示すものとしてきわめて重要な知見となりました。

丸先生がてんかんの基礎研究において重視されてきたのは次の4点でした（てんかん

研究 26(3)391, 2009)。

1. てんかんに伴って脳がどのようにバランスを取ろうとし、あるいは失っていくのかを正確に捉えること
2. 抗てんかん薬の開発に繋がる研究をすること
3. 動物の進化に伴うてんかんの意味を追求すること
4. 基礎研究を通して心理社会的なてんかん福祉のあり方を探ること

このように、深遠な神経科学的命題から臨床や福祉の課題に至るまで、知的にして誠実な眼差しをてんかんに向けられた基礎研究者は、世界を見渡しても稀有な存在であると思います。

また丸先生はつねに他者への配慮を忘れない方であり、学会で厳しく追及した研究者に対しても、どうすればその研究がより良くなるかを真剣に考えた建設的な意見を温かく伝えられて、研究者のモチベーションを高めておられたことも特筆すべきことと思います。

こうした丸先生の業績によって、1993年には日本てんかん学会評議員、1997年には同学会理事(5期連続)に選出されました。資格審査(・広報)委員会委員長としては、それまで閾の高かった入会条件を緩和され、開かれたてんかん学会として会員の大幅な増加と学会の興隆に寄与されました。また長期計画委員会では、学術総会での神経科学セッションを企画運営され、活発な研究交流の場とされましたし、現在まで17回を数え人気を博しているてんかん学研修セミナーの設立に大変な尽力をされるなど、研究、教育の両面において大きな足跡を残されました。

てんかん治療研究振興財団においても2006年から長く評議員、理事さらには研究褒賞審査委員長、研究助成選考委員長も務められ、数々の審査や企画、報告会での討論において最も重要な役割を果たされたお一人であることは言うまでもありません。

先生は目立つことを嫌われ、世間的な名声にも関心がおありではありません。しかしいつも主役を立ててサポートするというスタンスで、数々の重要な業績をなされ、間違いなくてんかん研究の中心人物であり続けてこられました。40年もの長きにわたり日本でのてんかん研究を拓き導いてこられた丸先生は、てんかん治療研究振興財団研究功労賞にふさわしいと考え、ここに推薦申し上げます。

岡山大学名誉教授

地方独立行政法人岡山県精神科医療センター副理事長・特任院長

山田 了士